

實相寺花園会報 第210号

令和8年10月1日発行 発行所 臨済宗妙心寺派 實相寺・實相寺花園会

〒761-0450 高松市三谷町1811番地1 TEL087-889-3838 編集発行人 山本 文匡 <https://www.jissouji.net>

今年は微妙大師650年遠諱にちなんで「小水の魚に楽しみ有り」の遠諱テーマについて書いてきましたが、少々話が岐に涉りすぎて、判り難くなったと思います。ただ先日、高松刑務所教誨師会の10分間法話のために、法話の骨子は同じですが内容をコンパクトにまとめた原稿を書いたので、こちらにも掲載しておきます。

「本物はどれだ？」

禅書『無門関』に「倩女離魂（せんじょりん）」という有名な問答があります。倩女とは唐時代の小説「離魂記」の主人公です。父親に見知らぬ男との縁談を勧められたものの、彼女には幼馴染の恋人がいたため、二人は駆け落ちします。やがて子供も授かり幸せに暮らしていましたが、十年がたち、両親のことが気になり、実家に帰ることを決意します。まずは夫が実家を訪ねて謝罪しようとする、実家では「倩女は十年前から病気で寝たきりになっている」と言います。「そんなはずはない」と驚いた夫が連れてきた倩女と、寝たきりだった倩女が出会うと、二人は重なるようにして一人になったという不思議なお話です。

このお話を踏まえた問答が「倩女離魂」で、中国宋時代の五祖法演（ごそほうえん）禅師は弟子たちに尋ねました。「那箇か是れ真底（どちらが本物だ）」と。

さて、一人の人間にも実は様々な側面があります。たとえば、職場では課長や部長といった役職であっても、家に帰れば妻にとっては夫であり、子供から見れば父親です。さらに我が子にとっては親ですが、両親から見れば幾つになっても子供は子供です。そう考えると五祖法演

禅師の問いは、単に駆け落ちした倩女と寝たきりの倩女のどちらが本物かを尋ねているわけではないことに気づきます。この問答は「では、どのお前が本当のお前なのか？」と私たちに問いかけているのです。

もう四十年も前のことになりますが、大学卒業後、三年ほど道場で修行させていただきました。入門して二ヶ月ほど経ったある日、先輩に連れられて市内の商店街を托鉢していた時のことです。男女六人ほどの若者グループが、こちらを見てクスクスと笑っていることに気がつきました。素足に草鞋を履き、網代笠に雲水衣という格好の一行が歩いているのですから、彼らから見れば何だか滑稽に見えたのかもしれませんが。ほんの数ヶ月前まで、彼らと同じように洋服を着て街を歩いていた私は急に恥ずかしくなり、咄嗟に「今は修行中だからこんな格好をしているけれど、これは本当の自分じゃないんだ」と思いました。しかし次の瞬間、心に浮かんだのは「じゃあ、本当の自分って何だ？」という強い疑問でした。

もし着ている服のブランドや、好きな映画や音楽といった趣味嗜好が「自分らしさ」の正体なのだとしたら、そんなものは玉ねぎの皮のようなもので、一枚ずつ剥いで裸になれば何一つ残りません。以来、「本当の自分とは何か？」という問いは、私の人生の大きな原動力になりました。

先ほど「一人の人間にも様々な側面がある」と述べましたが、仏教ではこのことを仏様になぞらえて「三身（さんしん）」という三つの分類で説明します。

一番目は「法身（ほっしん）」です。法身とは大日如来などが象徴する、宇宙的・普遍的な生命そのものです。私達一人ひとりには寿命がありますが、命そのものに寿命はありません。短くなったロウソクの火を新しいロウソクに移すように、私たちの命もまた先祖代々絶えることなく受け継がれてきました。この間、命のバトンは一度も途切れたことがないのです。仏教では、このような個人の時間や人格を超えた普遍的な生命を「法身」と呼び、私たちもまたその命をいただいていると考えます。

二番目は「報身（ほうしん）」です。阿弥陀如来やお釈迦様が厳しい修行（因）の報いとして仏（果）となられたように、過去の因縁の報いとして現れた仏様のことです。私たちは生まれる時、性別も国籍も親も選ぶことはできません。私たちが今の両親のもとに生まれたのは「ご縁があった」としか言いようがありません。そして現在の自分もまた、これまでの行いの結果です。「梅は只だ雪霜の先、花は猶お風雨の後（梅は雪や霜に負けず咲き、花は風雨に散っても猶香る）」という禅語もありますが、私たちはいただいた因縁の中でしか生きられません。しかし、その与えられた環境の中でどう生きるかは、自分次第なのです。

三番目は「応身（おうじん）」です。応身とは、苦しんでいる人々を救うため、相手や状況に応じて姿を変えて現れる仏様（三十三変化の観音様など）のことです。現代社会では「個性」が尊重されますが、個性とは最初からポツンと独立して存在するものではなく、直面する状況や役割に応じて具体的に働く中でこそ現れてくるものです。与えられたご縁の中で、自分なりの役割を果たして生きる私たちの姿もまた「応身」だといえます。

さて法身・報身・応身と人間の有り様を様々な角度から見てきましたが、では、一体どれが「本当の自分」なのでしょう？

私はどれか一つだけが本物なのではなく、

「そのすべてが本当の自分」なのだと思います。大いなる生命（法身）を宿し、さまざまなご縁（報身）の中に生まれ、いま目の前の役割（応身）を生きている。そのすべてが自分なのです。

禅書『碧巖録』に「肅宗十身調御（しゅくそうじっしんちょうご）」という問答があります。十身とは三身をより細かく分類したのですが、唐の肅宗皇帝が「十身全てを調べて悟った完全な状態とはどういうものですか？」と尋ねた際、慧忠国師は「毘盧遮那仏の頭を踏んづけていきなさい」と答えました。毘盧遮那仏は最も尊い法身仏です。その頭を踏んで行けとは、皇帝には理解出来ません。素直に「私には解りません」と言うと、国師は「自分を尊いなどと思てはいけませんよ」と答えました。

この問答について、昭和の名僧・山田無文老師は次のように解説されています。

「仏性（普遍的な生命）というものは人々が生まれながらにして持つておる。一人ひとりが箇々円成、円満具足しておる。そう分かるならば、十身調御は自分ではないか。毘盧遮那仏の頭を踏んでも何ともない。自分が仏だ。（しかし）そうとらわれてもいかん。仏を尊いととらわれてもいかん、我が心が仏だととらわれてもいかん。仏臭いものを一切払い捨てよ。こう忠国師は示しておられるのである」（カッコ内筆者注釈）

禅では絶対的な尊さを自分の外に求めることは間違いとしますが、「自分が仏だ、このままで良いのだ」と驕るのも間違いです。大切なのは、自分というエゴや我執をキレイさっぱり捨て去ること、無我になることです。

自分を無にして空っぽにして、与えられた目の前の役割に徹して成り切ったとき、私たちの生命は最も生き生きと輝き出し、その時こそ「すべてが本当の自分」になるのです。お互いに、まずは今、この目の前にある仕事や役割に一所懸命に努めてまいりましょう。